

NPO とふれあってみて

社会福祉学部 社会福祉学科 2年 秋田 楓

活動先：はっぴいわん大府

岡本ゼミ

① 自分の成長と気づきについて

自分ははじめ、NPO というものが何であるのか全く知らなかった。1年生の時の講義で何度も NPO というワードはでてきているのに理解をしていなかった。さまざまな地域で NPO は活動していて、自分の身近でたくさんの活動をしていることを知り、もっと早く気づくことができたならよかったとサービ斯拉ーニングを通して思った。そこが前の自分より成長した1つであると感じた。

自分の活動させていただいたサービ斯拉ーニング先は、少し他の NPO とは違っていた。事前学習でも代表の方のお話をたくさん聞き NPO とはこんなところもあるんだと気づかせてもらいました。活動先の理念が「市民が最後までいきいきと生きがいを持って、ピンピンと楽しく生きたい。はっぴいわんは皆の生きがいづくりのお手伝いをし、いつ来てもいい、いつ帰ってもいいみんなの家」である。この理念は本当にいいと思った。高齢化社会が進む中でこのようなみんなの居場所があることで地域での助け合いができていたのだと知ることができた。

代表の方は、助け合いをとっても大切にしているこのような方がもっと増えてほしいと思ったし、若者が率先してやるべきことだと感じた。年を重ねるごとになかなか地域との交流が少なくなり、友達をつくるというのはほとんどない。が、自分が活動した食事づくりなどを通して、お互いの顔を知り合い、助け合いの仲間をつくり、この町で安心して暮らせる他人家族をつくり、助け合っていきたいという理念もあることを代表の方からお聞きした。自分もそうですが最後まで自分の生まれ育った町で生きたいという方が多いと思う。そこで安心して暮らせることは精神的な支えに大きくなっていくと気づいた。

常滑市の大野町の居場所へ行ったときに利用者の方に質問をした。この居場所へ来たきっかけを聞いたとき、友達のお誘いなどあった中で、自分が1番印象に残っているのが、代表の方がいい人そうだったからという答えである。この答えを周りで聞いていた方々はみなさんそろってうなずいていた。自分も代表の方のお話を何度も聞いて感じたが本当にいい方であった。心の底から地域の皆さんを気づかいたくさん考えているのだとわかった。利用者の方々はそれをちゃんとわかっているのだと思ったし、感じているのだとこの答えを聞いて分かった。

利用者の方々に元気の秘訣を聞いたところよく食べてよく笑うことだそうだった。居場所ではお昼ご飯をスタッフの方々がすべて手作りで提供している。自分たちも活動の6日間毎回食べさせていただいた。自分たちが食べるのも多いくらいであるのに、みなさんしっかりとすべて食べていました。温かいご飯をみんなでおしゃべりしながら食べるというのは、大切なことだと改めて気づいた。自分は時間の都合もあり1人で食べることが多い。しかし、誰かにご飯を食べることは本当に大切なことだとこの活動を通して感じた。

利用者の方々がとても若く感じたのでそのお話しをしてみたらまだまだ大学生と全然しゃべれると言っていた。自分もこんな将来を迎えたいと思った。それと同時にこのよ

うな居場所があるからこそ利用者みなさんがいきいきしているのではないかと思った。

自分が成長したことは、コミュニケーションの能力が少ずついてきたことである。人と話すことが必要不可欠であったので1日目と6日目を比べると緊張がなくなっていきみなさんとお話が楽しみであった。まだまだ自分から質問はあまりできないが活動がなければ成長できなかったのでいい経験であったと思っている。

今回の活動を通して、人との助け合いというのはこれから先1番大切になってくるものだと強く感じた。お金や損得で動くのではなく心で動けることがいいまちをつくる第1歩であることを活動を通して気づくことができた。自分はこのように現場で実際に体験をしたことがなかったので人生の先輩方から就職の話、恋愛の話まで1からすべて教えていただき本当にうれしかったし、楽しかった。このようなNPO団体があることを忘れず、自分の今後につなげていきたいと思った。

② 活動を通してみえてきたこと

サービスマーケティングで代表の方に大府市と常滑市の社会福祉協議会につれていってもらった。社会福祉協議会ではあまり詳しいお話は聞きませんでした。自分は1度も入ったことがなかったのでこういうところだと少しは知ることができた。代表の方に社会福祉協議会のことお聞きして、社会福祉協議会に差があることがわかった。常滑市社協はとてもNPOとつながりがあり、岡本先生からもお話を聞いたが地域活動に積極的であると感じた。大府市は、自分の暮らしている地域なので常滑市のように活動を広げていってほしいと感じた。私は、このことをきっかけに発表のキーワードも社会福祉協議会にした。グループの中の1人に職員の問題について考えていた人がいた。自分にはなかった視点であった。社会福祉協議会の活動を課題であると思っていたが、すべての地域が同じようにできない理由があるのだとこのとき気付いた。職員1人1人のことまで考え、まずは1つ1つの社会福祉協議会にどんな課題があるのか知る必要があるのだと感じた。

サービスマーケティングを終えて

社会福祉学部 社会福祉学科 2年 金子彩未

活動先：はっぴいわん大府

岡本ゼミ

はじめに

事前学習、準備の段階ではNPOという存在やその意義を教科書的には理解していたものの、具体的な活動内容や存在意義をほとんど理解していなかった。NPOはなぜ必要なのか、これから地域にはどのようなニーズを求められているのか、全てを理解できたとは決して言えないが、夏休み期間のサービスマーケティングを通し知ることができたと感じた。

自分の成長と気づきについて

夏休み期間のサービスマーケティングと一年のゼミでの学びを通し気づいたことは、「居場所」は誰にとっても必要だということである。

私のサービスマーケティング先であった、NPO法人はっぴいわん大府は「いつ来てもいい、いつ帰ってもいい、もう一つの家」を目指している。その目標として掲げている通り、地域に住むお年寄りの方の集まれる憩いの場を作っていた。居場所づくりと言われても最初は全く分からず、なぜ居場所が必要なのか、もう一つの家とはどういうことなのかと疑問を抱え始まったサービスマーケティングであった。

サービスマーケティングを始め、まず驚いたことは、はっぴいわん大府を訪れる利用者の方々だ。とにかく元気で明るくはつらつとされている。ニュースや新聞で特集をされる高齢者は介護が必要であったり、ほとんど寝たきり状態の見えていて痛々しい姿の方ばかり。しかし、はっぴいわん大府を訪れる利用者の方は全くと言っていいほど異なった。仲の良いお友達どうしで集まりおしゃべりに花を咲かせ、週ごとに変わる習い事教室に熱心に取り組む姿には驚きを隠せなかった。私が今まで想像していたものは何だったのだろうかと思ってしまった。メディアが与える情報は正しい情報もあるが、全てが正しいわけではないということを身をもって理解した瞬間であった。

しかし、それを抜きにしても「元気すぎるのではないか」という印象であった。元気であることは悪いことではなく、むしろ良いことである。その元気はいったいどこからやってくるのかと疑問を持ちながら利用者さんとお話を重ねていくごとに、一つの答えに辿りついた。「お話しできる相手、仲間がいることは何よりも大切」という言葉を耳にした。はっぴいわん大府を訪れる方々は、人に会うために、お話をするために足を運ばれる。きっと、目的がなければ家に閉じこもって人と話さないという生活をされるのではないだろうか。何もしない、何もない変化のない生活では心も身体も死んでいく。だからこそ、はっぴいわんを訪れる利用者さんはテレビで見た高齢者とは違ったのだ感じた。そして、そんな高齢者のためにはっぴいわんは存在しているのではないかと感じた。



活動を通し見えてきた地域や市民活動の現状や課題

現在の日本社会は言わずと知れた少子高齢化社会である。それはどのような地域も同様であり、増え続ける高齢者の生活をどう支援していくかに悩まされていることが現実だ。しかし、高齢者用施設は常に満員であり、慢性的な人手不足に陥っており、全ての高齢者を支援していくことは不可能である。だからこそ、市民一人ひとりの自立が必要となるのだ。出来ないことは「助けて」と言って支援を乞うべきだが、出来ること、出来たことまでも人に頼るべきではない。行き過ぎた支援は自立を殺してしまう。介護保険や施設に頼るのではなく、はっぴいわんのような場所が必要なのだと考えられる。

なぜ、保険や施設に頼らざるえないのだと考え、それは、人とのつながりが希薄になっているからだから考察した。いざという時に頼れる人がいないことほど不安なことはない。だからこそ「居場所」が必要なのだ。自分がいてもいい場所、そこに行けば仲間がいるという事実こそ安心できるものはないのである。

笑顔でいるために ～共に成長すること～

社会福祉学部 社会福祉学科 2年 三浦華子

活動先：はっぴいわん大府

岡本ゼミ

私は居場所づくりをしている団体があるということを知りました。今回のサービ斯拉ーニングではじめて知りました。多くの高齢者が仲間と集まり楽しく時間を過ごし、助け合いながら生活をしている様子を見て、生き生きとした姿にこんなにも元気で居られる場所があるのだと衝撃を受けました。施設ではない高齢者が自由に笑顔で過ごせるような居場所が多くの高齢者に求められていることがわかりました。

まず、サービ斯拉ーニング先へ行き、感じたことは信頼関係ができているということです。「ありがとう」という言葉が常にとびかっけていて、全員がまるで家族のような和気あいあいとした空間でした。そしてさまざまな話をする中で最初は何をすればいいのかと考え込んでいた私は自然と打ち解けていけました。

はっぴいわん大府は、全くなにもない状態から小さい声を聞き、空き家を使えるようにするところから始まったという話を聞かせていただいたときは本当に驚きました。創立者の「なんとかしたい」という思いからどんどん活動が広がっていき、今では複数の場所で居場所をつくって、日々の生活を支えあっているのです。勇気と行動力があれば、大きな目標に強く立ち向かっていくことができ、不可能はないのではないかと感じることができました。そして、何かをやるまえから諦めてしまうことの多い自分を、とても情けないと思いました。どんどん物事にチャレンジしていくことで、可能性は大きく広がっていくのだと確信しました。



この「いつ来てもいい、いつ帰ってもいいもう一つの家」としての活動は言葉の通りだと思いました。手作りのおいしい食事をみんなで食べて、日常生活でのさまざまな他愛ない笑い話、または悩みなどを同じ場所にいる仲間と共有することで安心して居られる場所

を高齢者は必要としています。くつろげる場所だからこそ、意見がぶつかることもよくあると言っていました。想いがあるからこそ、ぶつかりあって共に成長していき、よりよい居場所になっているのだと感じました。

また、社会福祉協議会の働き方によって NPO の活動の仕方に大きく関わることを知りました。社会福祉協議会だけでは手の届かない細かい部分をはっぴいわん大府では行って、人と人とのつながりが手を取るよううかがえました。人とのつながりを大切にしている事で近所付き合いがとても良く、サービ斯拉ーニングの活動中にもたくさんの差し入れがありました。

金銭面でとても苦勞をされているお話を聞いていました。苦勞されている中でも人間関係ができているからこそ支えあうことができるのだと思いました。周りに常に頼れる人がいるという環境は誰にとっても素晴らしい環境だと思います。超高齢社会の中、孤独な方が多く、苦しんでいる人がいるかもしれません。手を差し伸べてくれる人が誰もいなかったとき、その人はどうなってしまうのだろうか考えると心が痛みます。このようにサービ斯拉ーニングへ行ったことで、はっぴいわんのような居場所を見つけられない方のことも考えることができました。

私のように、居場所として設けられているはっぴいわんという場所の存在を知らない人が多いのではないかと思います。超高齢化が進む中、高齢者が元気であるために仲間と共に支えあいながら過ごす場所は重要です。もっとこの活動が知れ渡り、広がっていけばいいなと素直に感じました。社会福祉協議会と連携をとり、小さな声を聞き入れることがよりよい地域づくりになるのではないかと考えました。これからまずは自分の地域で住民とコミュニケーションをとっていこうと思います。